



# フィリピン系看護師移民の移住適応および職業集団形成についての予備的考察：米国ミズーリ州セントルイス市への看護師移民を事例として

名護, 麻美

---

(Citation)

神戸文化人類学研究, 1: 創刊:58-75

(Issue Date)

2007

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCDOI)

<https://doi.org/10.24546/81003411>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81003411>



フィリピン系看護師移民の移住適応  
および職業集団形成についての予備的考察  
—米国ミズーリ州セントルイス市への看護師移民を事例として—

名護麻美

はじめに

本稿の目的は、1960年代以降専門職移民として米国国内でエスニックな職業集団として可視化しつつある、フィリピン系看護師移民たちの移住地における適応と自己および専門職業集団としての自己形成を分析することである。

フィリピンは、海外出稼ぎ労働者や移民からの外貨送金が国内経済を支えており、政府が率先して海外出稼ぎ政策をとってきた結果、全人口のおよそ1割にあたる800万人以上<sup>1</sup>が現在、国外に永住あるいは半移住でフィリピン国内を離れている。日本の植民地支配の後も米国が経済や政治の実権を握り、1946年に米国から完全独立した後も、旧宗主国である米国への依存が大きく、移民の主な行き先あるいは最終的な目的地は、米国であることが圧倒的に多い。米国に移住したフィリピン系移民は、メキシコに次いでその数が多いことで知られており、現在270万人を超えるフィリピン系移民が米国国内に滞在している。これらの移民は移住した年代により、性別、年齢、職業や社会的地位、出身地域が異なっている。

本稿で取り上げる看護師移民は、おもに1965年の米国における移民帰化法改正<sup>2</sup>以降専門の知識や技術を要する移民枠で米国に契約労働者あるいは永住権をもつ労働移民として移住を行ってきた。彼女たちは、近年先進国におけるケア産業での人手不足や高齢化社会の到来により増加する傾向にあり、これまで米国だけでなく日本を除く主要先進諸国および中東諸国へと労働移

動を行っている。中でも医療従事職者の主要送り出し国であるフィリピンは、毎年約1万人の労働移民を送り出しており、この傾向は数十年先まで続くと思われる。

看護師をはじめとする医療職に従事するフィリピン系移民たちは、これまでフィリピンが送り出してきた、家事労働職やその他の特定資格や技術を必要としない下層特定職種の出稼ぎ労働者たちと様々な点で異なっている。彼女たちは、米国が必要とする特定技術や知識をもつ外国人労働者として、当分米国にそのまま「居続けるよう」期待されている移民たちなのである。しかし、彼女たちがどのような経由で米国に移住し、米国社会に適応していったのかを個々の移民の経験レベルに置き換え、さらに職業移民集団を受け入れ国の移民社会の中に位置づけた研究はまだ数少ない[Choy 2003, Constable 1997, Espiritu 2002]。

本稿では、主に65年以降に永住ビザを取得して移民した、あるいは数年働いた後永住ビザに切り替えて現在米国市民となっているフィリピン系移民看護師たちの、米国ミズーリ州セントルイス市における移民としての経験と職業集団移民形成について考察し、近年増加した医療系専門職移民の移民状況を論じる。アジア系移民、さらにフィリピン系移民の比較的少ない中西部の都市という場所を視座に据えることによって移民労働者として渡米した第一世代の移民看護師たちの同地域における集団形成の事例と専門職移民たちの経験の語りの両方から考察を行う。

## 1. 問題の所在

これまでフィリピンからの国際労働移動に関する先行研究では、家事労働やエンターテイナーなどのいわゆる非専門職カテゴリーに入る雑多なサービス業、および特定の下層職種が研究対象となってきた。これらの先行研究で

は、海外移住者たちは渡航歴が長期化する中においても定期的に送金や仕送り、テキストメッセージの交換などを通して、故郷との紐帯を維持し、また移住に際しても親族などのネットワークが重要な意思決定要素となるという点が主張されてきた[長坂 2001, Lawless 2002, Parrenas 2001]。しかし看護師移民たちも、移民後も故郷との紐帯を維持し続ける点は変わらない。しかし、そうした従来の研究からは、自己の確立を達成する主体としての側面が見落とされがちであった。個人の移民経験の語りの中では、しばしば専門職移民としての自己の確立を達成した点に焦点を置いた語りがなされる。そしてこれらの経験が移民個人にとっても、そしてその家族や親族、さらにおいてはフィリピン社会においても影響力をもち、専門職者として海外へ移民し成功しようとする第二、第三の移民に波及する。そこでこの移民個人は、家族全体のために移動を行うだけでなく、時に自らの将来への希望や目的遂行のために意思決定を行う主体でもある。そこで本研究では、移民個人たちの経験に即した語りを中心に焦点をあて、彼女たちがどのように自らを語り、そして看護師移民としての経験を取り込んでいっているのかを明らかにする。

もう一つの問題は、これらの専門職移民がどのような経由で米国に移住し、米国社会に適応していったのかを個々の移民の経験レベルに置き換え、さらに移民集団全体を受け入れ国の移民社会の中に位置づける研究がまだ数少ないことである[Choy 2003, Constable 1997, Espiritu 2002]。移動の状況は、例えばフィリピン系看護師移民たちの場合、家族に看護師や医療従事職者がいることは看護職を選択する大きな誘因となるが、最終的に米国へ渡る場合、エージェント会社の契約によるビザ申請を行い、受け入れ病院先を探してもらい、さらに外国人看護師が就労するための各種資格を取得しなければいけないため、家族および親族のネットワークを契機とした移動よりも、個人の能力や性質が重要になってくる。そのため、言語集団や故郷を同一とするコミュニティの形成が他の国における状況に比べ穏やかになり、それ以外の要素が

個々の移民をつなぐ結節点となっていると考えられる。

## 2. 米国におけるフィリピン系移民コミュニティ

### 2-1 移民の流れと特徴

フィリピンから米国への移民は主に三つの時期とその構成グループに分けられ、第一期は、20世紀前半までに見られたハワイ州やカリフォルニア州などへの独身男性を中心とした単純労働移民、第二期は大戦後の退役軍人およびその家族や、戦争花嫁を中心とした永住移民、そして第三期の1965年以降の家族呼び寄せによる永住移民と専門職による枠で永住移民を行ったホワイトカラー層の移民に分けられる[Bonus 2000: 32-45]。1965年の法改正直後、1960年に米国に滞在するフィリピン系移民総人数の二倍にもなる約230,000人のフィリピン人が、主に親族カテゴリーによって移民した。専門職枠で移民を行ったのは主に看護師であり、その9割以上が女性によって占められたという。当時は外国人看護師に要求される資格試験や語学証明なども要らなかったため、米国に親族をもたないものでも看護師でありさえすれば労働ビザが比較的容易に与えられ、数年後に永住ビザに切り替えることが可能であったため、当時の独身女性を国内の看護職に多く引き付けた。

これらの新旧移民は、それぞれ米国社会において市民権を得て中流層の生活を営み<sup>3</sup>、その子供の世代における教育達成度も他のアジア系移民などと比べて比較的高く<sup>4</sup>[Okamura and Agbayani 1994:184]、米国におけるさまざまなエスニックグループとの国際結婚も進んでいる。

現在米国へのフィリピン系移民の主流は、専門職の中流層の移民と家族呼び寄せである。多くは、いずれ家族の呼び寄せを行う予定が将来的にあり、また子供をもつ家族の場合、都市部の犯罪率の高い危険な土地を避け、子供を安心して養育できる郊外へと移り住む傾向が見られる。彼らの生計手段や

職業は、サービス業を中心とした米国主流社会の中のビジネスに組み込まれるものが多く、華人系や韓根系、ベトナム系移民などの他のアジア系移民と比べると、同国出身の移民を顧客としたエスニックビジネスを営む者は少ない。

彼らは、故郷フィリピンにおける様々な出身地域から、主に親族を頼って移民を行い彼らと同居するが、やがて生活手段がたち、家族を呼び寄せる段階になると一軒家を近くに購入するか賃貸するなどして独立する傾向がある。ハワイなどのように故郷のイロコス地域とのネットワークで移民が行われた結果、同言語集団によるコミュニティ形成が見られることもあるが、米国本土における彼らフィリピン系移民のグループ形成は、主に家族や親族、友人関係、あるいは宗教の教派、退役軍人の組織などで結ばれていることが多い [Posadas 1999]。

## 2-2 フィリピン系看護師のアメリカへの移住

フィリピンからの看護師の移住は、20世紀初頭に始まる。米国植民地化のフィリピンに、最初に看護学校ができたのは1906年であり、バプティスト教会によってイロイロ市に設立されたのが始まりである[Giron-Tupas 1952]。当時看護学校に入学が許可されたのは裕福な上流階層の子女のみであり、米国への留学が始まったのは *pensionados* と呼ばれる研修制度のもとで渡米した留学生たちであった。その後、Exchange Visitor Program(EVP)などでフィリピンの中流層家庭にも留学の機会が拡大し、単身で海外旅行できる機会や、微々たるものではあるがドルを稼ぐことのできる機会、さらに先進国である米国で看護の技術や知識を学べる機会を求めて急激に看護師の渡米希望者が増加していった。統計によると、1966年から1985年までの20年間でおよそ25,000人、そして1989年から1991年の3年間で10,000以上のフィリピン人看護師が米国へ渡っていった[Espiritu 2002:55]。現在、フィリピンで国家資格をもつ

国内看護師の85パーセントが米国、カナダ、中東諸国、シンガポール、およびヨーロッパなどで就業しているという。

65年以降、フィリピンは米国で就業する外国人看護師登録数で第一位の出身国となっており、以来女性を中心とした医療職従事者の移民が専門職ビザカテゴリの中で重要な位置を占めてきた。現在、ニューヨーク市やロサンゼルスの East Hollywood などでは、カトリック系病院で働くほとんどの看護師がフィリピン系移民で占められているといわれており、しばしばこれらの地域では、看護師はフィリピン系移民の代名詞ともなっている。これらのフィリピン系看護師移民たちは大都市の病院だけではなく、地方都市や大学病院、また郊外の介護施設に至るまでその労働領域に組み込まれている。移住歴が長くなると、ICU看護師やチーフナース、あるいはコミュニティナースや看護学校で教職に就く者も出始めた。さらに医療から離れたところでは、フィリピンからの看護師リクルーターや、米国の看護師国家試験のレビュークラスを自宅で経営するものまで様々な「看護師」移民が存在する。彼女たちは、移住時には特定技術を持つ専門職移民として、永住移民ビザを取得し、家族で移動を行うことが可能である。そして米国移住後、退職金や年金受給対象になるまで働き続け、米国民権を得て、故郷のフィリピンへは年に数カ月のみ帰る移民も少なくない。看護師移民は、資格試験などの一定の条件を満たせば就労ビザを比較的取得しやすく需要も高い。そのため、故郷において医師であった人やあるいは医療と全く関係のない職に就いていた人までも看護師となって移住する例がしばしば見られる。

### 2-3 セントルイス支部フィリピン看護師協会の設立

著者が2003年10月から2004年7月にかけて行った調査では、セントルイス市のフィリピン系移民の主な組織として、Filipino-American Veterans Association、Filipino-Americans Association in St Louis、そしてPNA, St. Louis 支

部が確認できた。セントルイス市のフィリピン看護師協会の設立は最近になってからのことである。設立のきっかけは、2003年にイギリスからセントルイス市に移住してきたフィリピン人夫婦のうち、夫が交通事故で下半身不随となった夫婦を支援することがきっかけであった。

Salvador 夫妻はフィリピンのビコール地方出身で、ビコール州立病院で10年以上働いた後イギリスに移住しロンドンの病院で看護師として働き、友人看護師のついでで米国へ移民した。しかし移住後6ヶ月目に夫が交通事故に遭い、下半身不随の状態で働くことができなくなり、妻は看護師であったが試験を受けていなかったため配偶者ビザで移民したため就労できず、さらに当時第一子を妊娠していた。妻の Vina は、「夫は国に帰りたいがっていたけれど、私は彼に、ここ（米国）にいたら私たちの仕事や彼の治療のためにももっと良い機会があるから、あなたが自分で椅子に座れるようになるまで私たちはここに残る、と言った。」（2003年6月インタビューより）と語った。

同地区看護師協会の中で唯一博士号をもつ Linda は、「多くの看護師たちが、彼が米国に来てまもなく交通事故に遭い、妻も妊娠しているという噂を聞いたので、大変だということで小切手を送るようになった。たぶん毎月500ドルあまりぐらいの小切手が集まって、奥さんが働けるようになるまでそれが続くと思う」と筆者に説明した。この寄付行為は事故で働けなくなった夫の代わりに妻が看護師としてビザを得るための資格試験を受け、米国内の病院に就労するまで続けられるということで、看護師協会はさらに、妻の就労先の病院の斡旋まで手助けしていた。

当協会はその他にもセントルイス市内での移民看護師が違法なリクルート業者によって被害を受けた時などに対応しており、米国で就労するフィリピン系看護師の就労条件改善や移民看護師としての権利拡大のために地元の新聞記事に投稿するなど活発な活動を行い、数年に一度協会の代表を選出するなど、新たなメンバーを組み入れながらメンバーの再編成を行っている。ま

た、セントルイス市にある他のフィリピン系移民の退役軍人組織などのコミュニティ組織とも連携し、年に一度フィリピンピクニックやフィリピンからの文化公演団の招聘を主催するまでになっており、着実に同市における看護師の集団形成が出来上がりつつある。

次章で個々の看護師移民たちの経験の語りを取り上げ、看護師たちの個々の移住適応とその意味付けを考察し、彼女たちの自己表象について考察する。

### 3. 看護師移民の個人の語りと経験

#### 3-1 移住地の概要

米国におけるフィリピン系移民に関する先行研究はこれまで数多く報告されているが、そのほとんどは東海岸や西海岸の大都市などに集中し、その他の中西部地域における報告事例は少ない。本研究事例で取り上げる米国中西部のミズーリ州セントルイス市では、移民時期や出身地域の異なるフィリピン系移民が混在しており、彼らは主に郊外の白人中流社会コミュニティに溶け込んでいる。教派や出身地、言語集団による集住傾向がはっきり見られないため、新たな移民として参入する看護師たちが、故郷での出身地域や言語集団の枠組みを越え、看護師の職業集団として連帯を維持する状況が考察できた。

セントルイス市はかつて西部への玄関口として栄えた都市である。現在のミズーリ州の人口は約 560 万人あまり[U.S. Census 2000]で、全米で 17 番目の州人口となっており、フィリピン系移民は郊外の白人居住地区に一軒屋を賃貸するか購入するなどし、生活している。彼らの中には数件先に親族の家があり日常から食事を共にするなど、世帯内に親族が同居している場合も頻繁にある。また近年の若い単身女性の看護師移民の多くは、セントルイス市に散在する病院が借り入れたアパートに住んでおり、一人暮らしをするものも

多い。

米国に親族がいる場合は、親族が受け皿となり就職口を探し、移住後まもなくの間の経済的援助を行うことも多い。しかし、調査を行った地域では独身看護師たちのように親族をもたない看護師移民たちも多く、エージェントが空港で送迎しバスの乗り方を教え、生活費を前貸しで行うこともある。彼女たちの出身地は様々であり、マニラ首都圏だけでなく、セブ、イロイロ、イロコス、パンガシナン、パンパンガ、ラグナ、ミンダナオ島ダバオやスールー諸島など、フィリピン全土から集まり、特に決まった出身地域からの移民の流入があるようには見られなかった。

### 3-2 移住先での個人の経験の語りと意味付け

次に、セントルイス市におけるフィリピン系看護師移民個人たちの焦点をあて、彼女たちの視点から米国に移民を行った経験と就労先における看護師としての経験の意味付け、そして看護師移民としての自己の確立の過程を、五人の看護師移民の事例により考察を行う。

#### Jean (63歳、ラグナ州出身)

卒業後二年間赤十字病院で働いて、同級生たちがみんな Exchange Visitor Program で米国に渡っていたので自分も申請した。その時はここに来るための唯一の方法が看護師だけだった。そしてシカゴで看護師研修をしていた従姉と二人で研修後ヨーロッパに旅行する計画を立てたが本当に楽しみだった。当時フィリピン人女性が単身で旅行できるのは看護師ぐらいだったから。お金もそうだし、両親が見張っているから旅行なんて普通の人ができるものではない。独身でまだ若かった。

いったんフィリピンに帰って結婚した後、夫に内緒で米国での就職に応募したところ就職先の病院が決まった。夫は医者であったので米国に行く

のを嫌がっていたけれども、私がもう決めたからといって一緒に連れてきた。最初の頃の問題は、セントルイス市の病院で働いているときに、言葉のアクセントがおかしいということで白人看護師たちが影で笑っていたけれども、私は気にしなかった。要求された以上の仕事をこなして、産後休暇も早めに切り上げて一生懸命働いた。次第に上司からも仲間からも評価されるようになり、病棟のチーフナースにも就いた。給料はとてもよかったけれど、ストレスも多かったのを辞めて、今はパートタイマーでもうすぐ退職する。今のところでは24年間も勤めたから退職金をもらうまでするつもりだ。

Linda(50歳、北カマリネス出身)

私は博士号をもつ看護師で、現在は看護師コンサルタントをやっておりビジネスをもっている。また看護学校でレクチャーをすることもあり、外国人看護師のための米国の看護資格試験のレビュークラスを頼まれることもある。フィリピン国立大学の看護コースの二年目に、カナダで看護師をしていた姉が家族全員をカナダに呼び寄せた。私の家族にはすでに二人も看護師がいたので、姉は私に工学を専攻するよう言ったのだけど、私の叔母がフィリピンで看護師をしていて8歳の時から私も看護師になりたいと思っていた。それでカナダで高校を一年やり直して翌年看護コースへ入り、精神科病棟で働いた。夫は米国海軍に従事するフィリピン系移民で結婚を機に米国へ渡ることになった。私は自分の仕事や同僚の看護師たちが好きで、そして患者たちのケアをするのが好きだ。チーフナースを終わるとき、コミュニティナースとして推薦されたが、家族やコミュニティ全体の看護に関われるのはとても楽しかった。(カナダと米国で働いていた時の違いは？：筆者) カナダではあまりフィリピン人がいなかったのがフィリピンに対する知識がなくステレオタイプを持たれたことはなかったが、米

国では貧しいというステレオタイプがある。私の経験から言うと、同僚や患者の中には私を差別してみる人もいたかもしれないが、私がそう受け止めなかったからそこには差別は存在しなかった。

私は医者になりたいと思ったことはない。看護師はとても難しいプロフェッショナルな仕事で、情熱がなければいけない。患者の状況を精神的、身体的、感情的な面など全体的に見なければいけない。医者の分野とはまた違う。再度言うようだけれど、私は本当に看護の分野が好きだ。

#### Mona(40 歳、マニラ市出身)

米国の病院で秘書として働いていた友達に履歴書を渡して 1980 年にここにきたが、最初は米国の外国人看護師の資格試験を受けていなかったの で准看護師として働いた。それから色々な病棟で 24 年間も働いた。最初の 10 年は新生児病棟の夜のシフトで働き、それから外科に空きがでたので応募した。私は今の手術室アシスタントの仕事をとっても気に入っている。なぜなら、医者との共同作業だから。血管を結束したり切開部分を縫合したり。医者が私に頼っていて一緒に働くのがとても好きだ。私は手を動かすのも好きで、一緒に働くスタッフは小さなファミリーのようなものだと思う。フィリピンでは看護師は医者の指示で薬を与えたり、患者の体をきれいにしたり婦長の命令に従うだけだったけど、ここでは看護師でも仕事を任せてもらえるから達成感を感じられるし、自分も成長できる。ここでは、働いていれば何でも手に入るけどフィリピンに帰ったら働いても物がないから、ここに居続けるつもりだ。(2004 年インタビュー)

#### Mignon(30 歳、パンパンガ州出身)

本当は看護コースではなくて、学校の先生になりたかったので教育学部への入学を希望していたが、叔母が大学資金を出す代わりに看護コースじ

やないとだめだというので、仕方がなく看護コースへ進んだ。1996年に米国へ来たとき、すでに外国人看護師が飽和状態だったので最初は病院ではなく、老人ホームで准看護師として働くことになった。しかし同僚（特にアフリカンアメリカの看護助手たち）が、私を無視して仕事を助けてくれなかったので、大変な目に遭った。彼女たちは、自分たちが2年しかコースを終えてなくて外国人の私が学位をもっているので嫉妬していたのかもしれない。「彼女たちは外国人なのになぜ私たちが彼女たちより低い給料と低い立場に甘んじなければいけないのか？」って。でも、上司は私たちを平等に扱ってくれた。今の大病院の経営者は私たちフィリピン系看護師の努力や規律正しさに感謝している。私の働きを認めてくれて、フィリピン人看護師は働き者でよく患者をケアしてくれるので同郷に看護師がいたら紹介してくれと頼まれた。

### Donna(22歳、イロイロ市出身)

フィリピンの看護国家試験を受けて3か月後にここに来た。私のほとんどのクラスメートたちもロンドンやサウジ、カナダの病院に応募するつもりだ。だけど給料が一番いいのでやはり米国が一番行きたい国となっている。現在看護師の需要は高いからフィリピンでは沢山の人が看護コースに入る。理由？需要と給料でしょう、それから場所。ここの病院の器具はすべてハイテクだ。私の父は海軍にいたので兄弟は全員米国市民権をもっている。そしてここで仕事を探すために一番いいのが医療分野だったから看護コースに進んだ。今は姉と一緒に資格試験のレビューをしつつ試験に受かるまでは看護助手として働いている。

### 3-3 まとめ

1960年代に移住を行ったベテラン看護師と、90年代以降の新たな看護師移

民たちの語りの中には若干の違いが見られる。ベテラン看護師たちが看護師としての誇りと職業的使命感、海外への強い憧れ、自己の目標達成などについてしばしば言及するのに対し、90年代後半以降に米国に移住した20代から30代の看護師の語りの中では、看護師がフィリピン国内ですでに海外へ移民するための主な職業的選択であったことと経済的な理由がより強く打ち出されている。聞き取り調査では全部で25件のインタビューを行ったが、本稿ではそのなかで最も代表的な事例を5件提示した。また年齢層が上がるほど経験値が上がり、自らの職業的経験蓄積するにつれて自らの経験を高く評価する傾向があるという可能性もある。しかし、これら聞き取りから得られた傾向は全体を通して見受けられるものであり、また80年代以降から看護師の移民先が米国以外にもイギリスやサウジアラビアなどに広がり、看護を専攻する学生数も圧倒的に増えていることを考慮すると、60年代に渡米した看護師たちと90年代以降の国内看護師の飽和状態を見慣れた若い看護師たちの間では、職業選択の目的や国外で就労することに対する認識は異なるであろう。

さらに、どの移民看護師たちにも共通することは、移住先で感じる最初の壁である言語と文化の違い、そして見慣れない医療器具や予想以上に多いデスクワークの仕事内容などである。職場における最初の困難な状況に対し、どのように解決を図ったかを聞くと、どの看護師もとにかく一生懸命に働いて努力を認めてもらえるまでになった、としか理由を話さない。仕事から帰宅して実家に電話をしようとしても、電話代金がかさむので長電話を避け、あるいは時差で起床時間帯が違い、電話をすることができない、だから最初は働くことでホームシックを忘れ、たまに友人たちと外に出てフィリピン語や地方言語で会話をするのだ、ということであった。このように、職場における同僚との相互作用による自己の鍛練や上司からの評価、患者のケア経験、最新医療技術や知識の学習の積み重ねにより、専門職移民として着実に移民

社会に適応していこうとしている看護師移民の姿をみることができる。

フィリピン系看護師移民たちの社会適応を観察すると、米国社会の主流社会に最初から中流層移民として組み込まれる一方で、様々な困難を克服し、そして看護師として自己実現を達成、移民として主流社会の中で生きる経験を確立するに至った移民たちの自負心が垣間見える。そのため、新たに移民一世となった専門職移民たちは自らの経験を、故郷から離れた見知らぬ土地に一人で来て、様々な困難を乗り越えて自己実現した独立した個人である、ということを強調する傾向にある。ここではフィリピン系看護師移民たちの個人的な側面を分析したが、これらの語りや経験がフィリピン人看護師たちの少なくとも就労の場面における彼女たちの移民社会における自己表象につながっている。

おわりに

本稿では、専門職移民労働者である看護師移民たちのトランスナショナルな移動が、65年以降の米国の移民に関する法改正と、故郷における社会経済状況の悪化、そしてケア産業のグローバルな展開の中で、個々の移民が故郷を離れた米国社会に組み込まれながら、そこに経済活動以外の移民としての自己の経験の価値を見出し、看護師として自己を確立していく語りから、看護師移民の一側面を考察した。

個人の移民経験の語りの中では、しばしば専門職移民としての自己の確立を達成した点に焦点を置いた語りが見られた。そこには、時に家族全体の福利よりも勝る、自由な機会や海外への憧れと専門職者としてさらなる自己発展を求めて海外への渡航を決め、そして専門職移民として移住後に、独立した個を確立した彼女たちの自尊心が、自己の経験の中で大きなインパクトを占めていることが明らかとなっている。

さらに、個人レベルの移動経路を見ると、これまでのように親族ネットワークが主な移動経路となる場合も少なからず見られるが、それよりも病院とエージェントの契約による移動によって居住地も決まるため、移住地の選択や社会適応に親族の有無がそれほど関係してこない。看護師たちの移住後の自己形成の要因の中に、看護師であるという経験が重要な位置を占めているが、彼女たちにとっての職業的な誇りと移民としての成功経験の語りは、翻って故郷における看護師移民予備軍の再生産へとつながる結果となってきた。

近年の医療福祉分野における移民現象は、第三世界から先進国への移動経路が圧倒的に多いため、先進諸国による家内労働やケア労働の外部受注化、あるいは労働に関するジェンダー役割の不平等な押し付けであるといった批判が聞かれる。さらに、グローバル経済の中で、安い労働力として第三世界から移動を行ってきた専門職移民女性たちが、結局はインフォーマルセクターの中で搾取されることもある、という議論も少なくない。しかし、彼女たち移民看護師たちの語りから聞かれる、自己の経験の意味付けに関する豊かな語りをなくしてはこのような移動現象は起こらず、またそれらを打ち消した考察は彼女たちの存在を上滑りして批判論のみに陥ってしまう可能性がある。本稿ではこれらの声を拾い上げ、彼女たちの様々な経験と意味付けの考察を行った。今後、個人としての移民の経験がこれらの批判の中にどのように位置づけられるのか、また本稿の事例が、フィリピンから他国や他地域に看護師として移動を行った事例とどのように異なるかを明らかにする必要がある。これらの点を次回の課題とし、結論とする。

## 謝辞

現地での調査は、平成 15 年度から 16 年度にかけての筑波大学大学院地域研究科時代に米国ミズーリ州セントルイス市に交換留学の際に行ったものであり、平成 16 年度都築国際育英財団日本人留学生助成を受けて可能となっ

た。何より、筆者の交換留学時代にコースワークとして始めた調査に応じて下さったセントルイス市の移民看護師の皆様の辛抱と激励のおかげである。ここに記して感謝の意を表したい。

---

<sup>1</sup> 2006年度のフィリピンの人口は、約8,697万人である(Asian Development Bank: Basic Statistic 2007)。そのうち、永住移民による移民数が約3,556万人、主に海外出稼ぎによる半永住移民が約3,802万人、違法移民が874,792人、合計8223,172人(2006)(Philippine Overseas Employment Administration 資料)となっている。この数値は、あくまでフィリピン側で登録されている移民数であり、多くの違法移民が報告されていないことに加え、出稼ぎによる移民の場合も、例えば親族を頼って労働ビザを取得し移住を行った場合などは、POEAに登録されない。したがって、どの機関においても推定でしか把握できない状況である。

<sup>2</sup> 1965年の米国移民帰化法改正は、これまで出身国によって年間の移民割当数が割り当てられるクォーター制が取られていたものが、米国市民の家族や親族を優先とし、また特定の技術や資格をもった移民を優先とする選別方式に変わったことである。またこれ以降、これまで2,3年すると本国へ帰国しなければならなかった医師や看護師などの専門職移民たちが、永住ビザに切り替えて米国に永住するようになった。

<sup>3</sup> フィリピン系アメリカ人の世帯あたりの年平均収入はアメリカの白人中流家庭の平均と劣らないかあるいはそれ以上であるといくつかの研究で報告されている。しかし、それはフィリピン系移民の世帯あたりの就業者の人数が多くの場合複数であることによるものであることが指摘されている。

<sup>4</sup> Okamura and Agbayani [1994]によれば、1990年のUSセンサスにおいて、フィリピン系移民の学士取得率は女性(42%)が男性の取得率(36%)よりも高く、これは65年以降の専門職移民の増加によるものであるという。しかし、教育達成率のレベルが高いにも関わらず、年収や職業の社会的立場においては特に男性の場合において差別されている状況が見られる。例えば、大学出のフィリピン系男性移民の年収平均は\$5,500で、これは同様な立場の白

人アメリカ人男性の\$10,100 や日系アメリカ人男性の\$15,600 よりも過小評価されている結果である。

参照文献

Bonus, Rick

2000 *Locating Filipino Americans: Ethnicity and the Cultural Politics of Space*.  
Philadelphia: Temple University Press.

Choy, Catherine Ceniza

2003 *Empire of Care: Nursing and Migration in Filipino American History*,  
Manila: Ateneo de Manila University Press.

Constable, Nicole

1997 *Maid to Order in Hong Kong: Stories of Filipina Workers*, Ithaca: Cornell  
University Press.

Giron-Tupas, Anastacia

1952 *History of Nursing in the Philippines*. Manila.

Espiritu, Yen Le.

2002 “Filipino Navy Stewards and Filipina Health Care Professionals:  
Immigration, Work and Family Relations.” *Asian and Pacific Migration  
Journal* 11 (1): 47-66.

Lawless, Robert

2002 “Philippine Diaspora.” in *Migration, Diasporas and Transnationalism*,  
Steven Vertovec and Robin Cohen (eds.), Vol.3 (3), pp.244-253. UK:  
Edward Elgar Publishing Limited.

長坂格

2001 「故郷で養育される移住者の子供達—フィリピンからイタリアへの

移住における家族ネットワーク」『民族学研究』66(1): 26-48.

Okamura, Jonathan and Amefil R. Agbayani

1994 “Pamantasan: Filipino American Higher Education.” In *Filipino Americans: Transformation and Identity*. Root, Maria.P.P. (eds.), pp.183-197.  
California: Sage Publications.

Parrenas, Rachel Salazar

2000 *Servants of Globalization: Women, Migration, and Domestic Work*. Manila:  
Ateneo de Manila University Press.

Posadas, Barbara M.

1999 *The Filipino Americans*. Westport: Greenwood Publishing Group.